

南スマトラの思い出

陳野好之

私が同地を訪れたのは1981年暮れで、約6年前にさかのぼり、しかも1か月という短期間だったので、当時の記憶も大分怪しくなっている。しかし、本紙随想欄に執筆の機会を与えられ、折角の機会なので同地での印象をなんとか呼び戻しながら、その責を果たしたいと考えている。不備な点はこのような時の流れに免じてお許しただきたい。私に与えられた仕事は日イ森林造成技術プロジェクトが開設したブナカット苗畑における病害の診断と防除対策であった。ここは南スマトラ島の中心、パレンバン市の南西約180 kmの地点にあるが、苗畑の規模、内容などについては山手広太さんによって本誌 No. 68 (1983)、新 No. 3 (1985) で詳しく紹介されているので省略したい。

1. ブナカット苗畑の病害

着任早々、長期滞在中の苗畑専門官山手広太さんに案内されて苗畑をひととおり見せてもらった。レンガを並べて整然と区画された苗床には見慣れない苗木が勢いよく伸び、スプリンクラーが忙しげに灌水していたのが第一印象であった。山手さんから樹種名を一つ一つ教わったが、一度ではとても覚えられないので、手帳に書きとめておいた。

さて、まず目についた病気はメルクシマツ (*Pinus merkusii*) の葉枯病であった。この病気に侵された苗木は地際に近い針葉から黄褐変、しおれなどの症状が現われ、これが次第に上部に及ぶが、病状の進行が早く、生育の減退や枯死を招く(写真-1)。私は日本から携帯用顕微鏡と必要な道具、薬品類を持参したので、早速病原菌の検査を行ったところ本病の病原菌 *Cercospora pini-densiflorae* の寄生を確認した。本菌は元来が熱帯や亜熱帯地方に広く分布し、多くのマツ類に寄生して葉枯性疾病を起こすことが知られている(小林享夫, 本誌 No. 8, 60~63, 1987)。わが国では関東南部以西の温暖な地方で時として問題になるが、かつて、徳島県下の或る苗畑でオリンピック記念として養苗していたフランスカイガンショウ (*Pinus pinaster*) 苗が本病のために全滅した記憶が即座によみがえってきた。

ただちに、激害苗は抜き取って焼却し、軽害苗は人手に物をいわせて病針葉を丁寧

ZINNO, Yoshiyuki: Memories at Benakat, South Sumatra
農林水産省林業試験場東北支場



写真-1 葉枯病に激しく侵されたメルクシマツのポット苗



写真-2 炭そ病に侵されて生育が止まり枯死寸前のカマバアカシア(*Acacia auriculiformis*) 苗 (d)

る。後者でははじめ葉や幼茎に淡褐色、小さい斑点が作られ、これが次第に大きくなるとともに黒ずんでくる。病葉は萎縮、巻き込み、幼茎も萎凋し、生育は全く止まってやがて枯れる(写真-2)。本病もかなり激しく発生していたため、メルクシマツ葉枯病に準じた防除処理を行うこととした。なお、炭そ病については本誌に解説(小林亨夫, No. 7, 64~66, 1986)がある。

その他にも2, 3の病虫害を観察したが、紙面の都合で割愛するので、詳しくは森林防疫(32巻, 122~126, 1983)または日本林学会東北支部会誌(No. 34, 113~115, 1982)をご覧いただきたい。

私が述べるまでもなく、当地方の苗畑では苗木の生育がきわめて早く、したがって養苗期間がいたって短い。一方、病原菌の繁殖もおう盛で、乾期には若干の停滞はあっても1年中をとおして感染の機会を持つものと考えてよい。このような両者の係わりを考慮して早期発見に努め、適期に綿密な防除処理を行うことが肝要であろう。

に切り取って焼却した後、すべての苗木に対して薬剤による定期的な予防散布を行うこととした。なお、その後機会があって当地方の2, 3の苗畑を往診したところ、いずれの苗畑でも本病の激しい被害を観察した。私がえた情報では当地方のメルクシマツ苗の本病被害は約80万本にも達していると推定された。

これほど激しい本病も当苗畑担当の懸命な対応によって、約2年後にはほぼ完全に防除されていたようである(佐保春芳, 本誌 No. 8, 43~47, 1987)。

次にはセンゴンラウト(*Albizia falcataria*)とアカシア類(*Acacia auriculiformis*, *A. mangium*)の幼苗の炭そ病が目についた。このうち前者では、まず葉が急に黄変して激しい落葉が起こり、生育が停止する。病幼茎は黒ずんで水浸状の斑点が形成され、くびれて下垂し、間もなく枯死す

2. ウメ干しと蚊取り線香

なにしろ、初めての熱帯地方への旅なので、諸先輩に耳を傾け、必要といわれた品はできるだけ持参したが、その中でウメ干しと蚊取り線香は特に思い出に残っている。もともとウメ干しは好きではなかったし、興味も持たなかったから、いわれたとおりに固く、小粒のものが入ったビン詰めをいくつか持参した。炎天下で1時間も仕事をすると、全身に汗がふき出す。事務所（1部屋を実験室に使わせてもらった）に戻ってやおらウメ干しを口に含み、ゆっくりとかみしめる。なんともいえない爽やかさが喉にしみ込んでゆく。不馴れな蒸し暑い環境下で、手頃な塩気と酸味が体を癒してくれたものと今でも信じている。それ以来、小ウメの味覚から離れられなくなったが、この味が時には当時のブナカットの生活を思いおこさせてくれるのである。

当苗畑の一角にひときわ近代的な建物がほぼ完成されていた。これが小型無償協力によるゲストハウスと聞かされたが、私が滞在中は残念ながら入居できなかった。冷房装置が組み込まれたプレハブが私の居室であった。昼休み時にはここで冷房を一杯に効かせて休息し、夜も最低ながら冷房を切ることはなかった。居室の片隅には常に蚊取り線香の煙が立ちのぼっていた。そのお陰か、夜中に蚊の襲来に悩まされることは全くなかったし、冷房機の運転音もさほど気にならずに安眠できた。しかし、実験室で仕事中には、どこからか蚊が侵入してきては邪魔をさせられた。この時はさすが蚊取り線香のお世話になることにしたが、その忌避効果はかなり優れていたようである。

3. 渡し船と少年

パレンバン市からブナカット苗畑までは約180kmの道程である。私は専門官やカウンターパートの人々とジープに便乗し、毎週月曜日にパレンバンを発ってブナカットに行き、金曜日まで滞在して再びパレンバンに帰る。いわゆる金帰月来の生活を送ったが、ジープで運ばれた片道約5時間の行程には忘れがたい事柄が多い。滑り止めのためにスノータイヤをつけて赤茶けたカマボコ型の平坦な道をどこまでも走るが、炎天下にキラキラと輝いていた2本の轍が今だに目に焼きついている。

さて、パレンバン市から約100kmほど走った辺りと記憶しているが、ルマタン川の河岸に到達する。雨期のためか満々とたたえられて濁った水が緩やかに流れていた。ここには橋がなく、有料のフェリーボートを利用して対岸に渡ることになる。自動車が何台か貯まるまで、最低30分くらいは待たされる。船着場の両側には小屋掛けの数軒の店が並び、パイナップル、ランブータン、マンゴスチン、ドズークなどの果物を売っていた。乗船前のひと時を利用して当地の新鮮な果物を賞味するのが楽しみであった。ある店でマンゴスチンを買って果肉を接写しようとしたら、店の主人が特上のものを一つ、器用に割って被写体に提供してくれた。大変気のよい人であろう。

濁った川の中に入って洗濯をしている主婦がいた。間もなく同じところに来て米をとぐ親子らしい姿を見かけた。この辺まではさほど気にしていなかったが、小さな洗

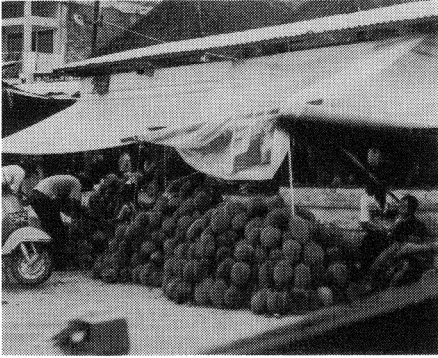


写真-3 店先に山と積まれたドリアン

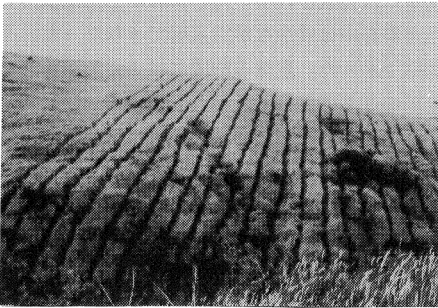


写真-4 アランアラン草原の地拵え（筋状に耕耘する）

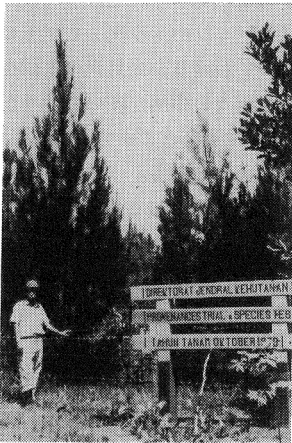


写真-5 植栽2年後のメルクシマツ（左は山手広太さん）

面器を片手に持った男がそのかわらでゆっくりと水浴を楽しんだと思ったら、やおら歯を磨き始めた。濁水を利用しての洗濯、米とぎ、歯磨き、私どもにはかなり抵抗のある行為だが、ここでは自然な姿として受け止められているようであった。

フェリーボートに乗ると、どこから現れたのかやや汚れたシャツを着た少年が果物の入った平べったい籠を頭に乗せ、ランブータン、マンゴスチンと言いながら寄ってきて離れない。10個ほど束ねたランブータンを買ってやったら満足気な笑顔を残して去っていった。その笑顔がいまだに忘れられない。

4. ドリアン

太く、大きなトゲを密生し、パイナップルよりもやや大型、楕円形、天国の味と地獄の匂いを持つ

といわれるドリアン。私がいまさら紹介する必要のない熱帯地方の代表的な果物である。これがちょうど収穫期だったようで、何処へ行ってもお目にかかれた。というよりもその異様な臭気に悩まされたといった方が適切かも知れない（写真-3）。厚い皮をナタなどで割ると乳白色、どろりとした果肉が顔を出す。ここを手づかみで悪臭もなんのその、なめるようにして食べる。私も勧められ、鼻をつまんで何度か挑戦してみたが、とても天国の味を楽しむ境地にはなれなかった。ブナカット付近はドリアンの産地のように新鮮なものが安く手に入るらしい。苗畑事務所や宿舎の周りには食べかすが散乱して悪臭を放ったことがあった。初めのうちはその匂いに全く閉口したが、馴れてくるに従いそれほど気にならなくなるから不思議である。

金曜の午後、ジープに乗り込んでパレンバンに向

かう途中のことであった。誰かがドリ안의強い匂いがするといって騒ぎだした。ジープには積まない申し合わせになっていたらしく、車内点検が開始された。しかし、車内には一向に見当たらない。やむなくジープを停めて総点検となった。その結果、後部のバンパーにしっかりと結びつけられた、布袋に入った多数のドリアンが発見された。その処置がどうなったかはさだかではないし、いまさら暴露する必要もない。ドリ안의持つ魅力と強烈な異臭がもたらした一つの笑い話である。

お わ り に

わずかに1か月の滞在ではあったが、ブナカット苗畑で生産された苗木がトラックに満載されて試植林に次々と運ばれ、私も何度か造林地を訪れることができた。背丈を越すようなアランアランの広大な草原を筋状に耕耘し(写真-4)、酷暑と戦いながらの造林作業は大変な苦労と周到な計画、多くの技術を伴うことは想像に難くない。特に長期滞在の各専門官のご努力に対しては頭の下がる思いであった。一方、植付け後2年ほどで数mにも成長したメルクシマツ(写真-5)やアカシアを見せさせていただき、関係者のご苦労が着々と実りつつあることも痛感した。その後いつの間にか約6年の歳月が流れた現在、見事な造林地が各所に生育していることを想像し、遙かな南の国に思いを馳せるのである。

新刊紹介

◎熱帯生態と土壤物理学 (LAL, R.: Tropical Ecology and Physical Edaphology. John Wiley & Sons, 732 pp., 1987. 邦価約30,000円)

著者 R. LAL はナイジェリアのインバダグンにある国際熱帯農業研究所 (IITA) の土壤学者である。本書は(1)熱帯生態、(2)生態的要因と土壤の物理性、(3)土壤への人為の影響、(4)熱帯農業発展にむけて、の4章からなる。(1)の熱帯生態は一般的な生態の記述でなく、書名を反映して、土壤に影響を及ぼす気象条件に焦点がおかれている。(2)は植生と土壤、とくに、ミミズ、シロアリ、アリの熱帯土壤生成に及ぼす効果について、(3)では人為の影響、すなわち耕耘方法、栽培方法のちがいが土壤に及ぼす影響、そして(4)では熱帯農業での土壤保全、その技術についての展望が述べられている。紹介者が土壤動物に関心を持っているせいもあるが、熱帯での土壤生成にはたす土壤動物の影響・効果を多くの論文を参考にして述べ、その役割を評価していることは特筆されよう。(渡辺弘之)